

2017年10月29日川越教会

## ヨブの救いと主の御旨

丸山 勉

### 【聖書】 ヨブ記 42章 1～6節、12～17節

ヨブは主に答えて言った。あなたは全能であり 御旨の成就を妨げることはできないと悟りました。「これは何者か。知識もないのに 神の経緯を隠そうとするとは。」そのとおりです。わたしには理解できず、わたしの知識を超えた驚くべき御業をあげつらっておりました。「聞け、わたしが話す。お前に尋ねる、わたしに答えてみよ。」あなたのことを、耳にしてはおりました。しかし今、この目であなたを仰ぎ見ます。それゆえ、わたしは塵と灰の上に伏し 自分を退け、悔い改めます。

主はその後のヨブを以前にも増して祝福された。ヨブは、羊一万四千匹、らくだ六千頭、牛一千くびき、雌ろば一千頭を持つことになった。彼はまた七人の息子と三人の娘をもうけ、長女をエミマ、次女をケツィア、三女をケレン・ブクと名付けた。ヨブの娘たちのように美しい娘は國中どこにもいなかった。彼女らもその兄弟と共に父の財産の分け前を受けた。ヨブはその後百四十年生き、子、孫、四代の先まで見ることができた。ヨブは長寿を保ち、老いて死んだ。

### 【序】 人間は「根源」を問う存在

あと30年もすると人工知能(AI)が、今人間がしている大分多くの仕事を替わりにしている世界になっているだろうとニュースで言っていました。「お前よりもロボットの方がずっと確かな仕事をする。先を予想することだって出来る。もうあなたは必要ない」と言われてしまうのでしょうか？ちょっと空恐ろしい気がします。

俳優の武田鉄也氏がラジオ番組で、松本徹三と言う人が書いた『AIが神になる日』という本を紹介しながら、このようなことを話していました。「AI、ロボットは、確かにこれまでの膨大なデータを瞬時に処理して、今後の事を人間にアドバイスすることだって出来るでしょう。しかし、AIの頭脳が苦手なことがあると思う。それは「根源」を問うことです。哲学的なことです。＜この世界＞とは？＜他人＞とは？そして＜生きる＞とは？＜苦しみ＞とは？――それをAIは問うことは出来ないのですよ。人間にしか出来ないのですよ」と。

聖書の中に「ヨブ記」が重要な書物として置かれているということは、大きな意味があるのではないのでしょうか。私たちの人生には、どういう訳か分かりませんが、突然のように耐え難い試練や苦しみと出会わされる、ということが起こってくる場合があります。聖書は、その問題を避けて通過することはないのです。

## [1]ヨブの救いとは

さて、この「ヨブ記」について、一か月間この礼拝の中で一緒に考えてきました。今日はその最後の部分です。この一番最後の部分は**ハッピーエンド**になっています。

初めの第一章で、サタンが神様に、ヨブについて言いますよね。「利益もないのに神を敬うでしょうか」と。「利益もないのに」です。そのヨブが、結局最後は豊かになって祝福されて、はい、おしまいと言うのでは、何かちょっと説得力がないと言いますか、肩すかしの様な気分を抱いてしまいます。もしかしたら、この最後の部分は後代からの付け加えなのかも知れません。けれども、私は今回、もう一度ヨブ記をじっくりと味わう中で、ああ、この最後の部分が聖書に書いてあることは意味があるなあと思ったのです。その理由は後ほどお話ししたいと思います。

さて、「ヨブの救い」とは、一体どういうことなのでしょう？

少なくともこの 42 章の前半の部分では、ヨブ自身は、**普通の人間の尺度から見ればまだ「不幸」そのもの**です。独りで闇を背負ってしまっているような人生です。

にもかかわらず、38 章以下で神様がヨブに直接話しかけられたことに始まって、途中短いヨブの応答の言葉がありますけれども、実に 38 章から 41 章までは、その殆どが神様の言葉であるのですが、ヨブはその神様の言葉を聴いて、こう言っているのです。42 章の 1～3 節です。

「ヨブは主に答えて言った。あなたは全能であり、御旨の成就を妨げることはできないと悟りました。『これは何者か。知識もないのに 神の経綸を隠そうとするとは。』そのとおりです。わたしには理解できず、わたしの知識を超えた驚くべき御業をあげつらっておりました。」

ヨブはここでもう神様に反発をしていません。むしろ、**神様に「降参」**をしています。「あなたは全能であり、御旨の成就を妨げることはできないと悟りました」とある通りです。私はこのヨブの言葉そのものも意味があることだと思いますが、それ以前にまずヨブが本当に嬉しかったことがあると思います。

それは、**神様が直接、自分自身に声をかけて下さったという、出来事そのもの**です。言い換えれば、**神様は本当に生きておられたのだ！**ということです。これまで自分自身が受けてきた苦しみの数々も、そしてそれゆえに嘆き、呻き、訴えてきたその自分自身そのものを、神様は聴いて下さっていたのだ、自分は確かに覚えられていたのだ！という深い納得が、ヨブの心の中に与えられたのでないでしょうか。それは、病気が癒される、癒されない、という外的な癒しよりも、**もっと深い、神様との人格の結びつき、魂の平安**と言うべきものだったと思います。私はこれがまず、ヨブにとっての救いであつたのだと思われました。

## [2]ヨブの心の嵐の中で

ヨブの人生は、ある言い方からすれば、苦難を受けた後、それを神様に訴え続けた人生だったとも言えると思います。私はこの間お話しさせて頂いた時、『詩編を祈る』というW・ブルグemanの本からこんな言葉を引用しました。

「丁寧で礼儀正しく控えめなことが信仰的だとするなら、彼ら(詩編の詩人たち)は信仰的ではありません。彼らが信仰的であるのは、この混乱状況を、聖なる方に向かって、真正面から言葉で語ろうとしているという、その意味においてだけです」。

私たちは、いえ私は、もしかしたら、そのように神様と取っ組み合っ関わっていくということに信仰的に淡泊になってしまっているのかもしれませんが。あのヤコブが「祝福して下さいなければあなたを離しません」と天の使いと組打ちをした、と言う記事が創世記(32章)にありますけれども、神様はむしろ、そのように 私たちが食い下がって来ることを望んでいらっしゃるのではないのでしょうか？ 自分の「運命」イコール不変の神様のみこころ、と思わなくてもいいのですね。 主イエス様も「求めよ！」、「叩け！」と仰いました。

神様はヨブに、38章にあるように「嵐の中で」声をかけられました。それは40章6節でも繰り返されているのです。「主は嵐の中でヨブに答えて仰せになった」。先週山下先生がこの「嵐の中で」とは、色々な解釈があるけれども、「ヨブ自身の嵐のただ中に」主が声をかけて下さったのではないかと思う、と仰ってハッとさせられました。そうなのだ、と思いました。神様はヨブの心の嵐を見ごしにされるお方ではないのですね

そのヨブの心の嵐とは何でしょうか？——それは、苦難の意味を問わずにいられない苦しさだったのではないかと思います。「なぜ、私が、この私がこのような苦しみに合わねばならないのですか？これは何かの罰なのですか？理解できません。私はあなたを信じてきました。あなたの御心が私には分りません…」。そんな格闘だったのだと思います。

そのヨブなのですが、いえ、ヨブだったのですが、先ほど読んだ42章では「あなたは全能であり、御旨の成就を妨げることはできないと悟りました。」と語っています。神様が『これは何者か。知識もないのに 神の経綸を隠そうとするとは。』と問うたその問いに対しては、「そのとおりです。わたしには理解できず、わたしの知識を超えた驚くべき御業をあげつらっておりました。」と語っています。

これは凄いことではないでしょうか。ヨブは変えられているのです。体は相変わらずひどい皮膚病のままです。その外見は3人の友人がひるむほどです。しかし、彼の心は「御旨の成就を妨げることはできないと悟りました」と言えるほどに解放されているのです。そこに至るまでには、繰り返しになりますが、彼の内的な格闘があったのです。

## [3]主イエス・キリストの戦い

私は、この「あなたは全能であり、御旨の成就を妨げることはできないと悟りました。」と

いうヨブの言葉に、新約聖書のもう一人の方の言葉を重ね合わせる事が出来るように思い起しました。あの主イエス・キリストです。あのイエス様も、十字架にかかれる前夜、神様との間で格闘してこう祈ったと記されています。

イエスはひどく恐れてもだえ始め、彼らに言われた。「わたしは死ぬばかりに悲しい。ここを離れず、目を覚ましていなさい。」少し進んで行って地面にひれ伏し、できることなら、この苦しみの時が自分から過ぎ去るようにと祈り、こう言われた。「アッバ、父よ、あなたは何でもおできになります。この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしが願うことではなく、御心に適うことが行われますように。」(マルコ 14 章 33～37)

主イエス様も、神様の御旨を問うて問うて、本当に苦しまれたのです。「何故、この私が、人間が神様に背いた罪の贖い、供え物となって十字架に架からねばならないのですか？父よ、出来ることならこの杯は受けたくありません」と祈りの中で葛藤されたのです。私たちは、この時どんなに激しい霊的な格闘が、主イエス様の中で起こったのかは本当には分かりません。ただ聖書に記されているところを受け取るのみです。…短い祈りではなかったと思います。近くにいた弟子たちが眠りこけてしまったくらいですから。そのゲツセマネでの祈りの中で、最終的にイエス様が決断されたことは何だったのでしょうか？

ヨブとあの言葉と同じです。「あなたは全能であり、御旨の成就を妨げることはできないと悟りました。」イエス様はこう仰いました。「父よ、あなたは何でもおできになります。…しかし、わたしが願うことではなく、御心に適うことが行われますように。」…ヨブの苦しみは、時を超えて、神の独り子イエス様の苦しみと結びついているのです。

人間は、苦難を身に受けると「なぜ？」と問います。つまり、理由を問います。答えが知りたいのです。そうでないと安心できないのです。その理由の答えを、ヨブのあの3人の友人たちは、因果応報の考え方で捉えました。火にない所には煙は立たない、と言う考え方は、その方がある意味心に整理が付きやすいのです。しかし、聖書はその考え方を退けます。イエス様は生まれつきの盲人に仰いました。「あなたが生まれつき目が見えないのは、あなたの罪でも、親の罪でもない。ただ神のみわざが現われるためだ」(ヨハネ 9 章)と。

なぜ私たちの人生に「苦難」があるのでしょうか？その答えは、今は私たちには隠されていると思います。まことの神様だけがご存知です。そして、私たちは忘れてはならないと思うのです。あの主イエス様が、究極の「なぜ」を神様に向かって叫んで死んで行かれたことを。「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」。(マルコ 14:34)

この「なぜ」が向うところは神様です。私たちの頭の理解を遥かに超えたところに「主の御旨」があるのです。しかしそれは私たちを滅ぼす主の御旨ではありません。私たちを救うためです。そのために主は、私たちの罪と苦難の全てを背負って十字架で命を献げて下さ

ったのではないのでしょうか！

#### [4]変えられたヨブ

ヨブの時代、もちろんまだイエス様はおいでになっておりません。しかし私たちが主イエス様にあって救いを頂くという筋道と、ヨブが救われる筋道は大事なところで共通しています。それは一言で言えば「ただ恵みによって」ということです。

ヨブ記 40 章で面白い言葉があります。4 節で「私はこの口に手を置きます」と。口語訳では「口に手を当てるのみです」となっていました。黙るのです。つぶやきを止めてひたすら聴くのです。主の言葉に。ヨブは神様の声を聴いた時におしゃべりをやめたのです。不思議ですね。私たちも信仰を与えられた時というのは、**神様の前に降参する時**だったのではないのでしょうか？ 知的な理解の積み重ねが信仰にはならないのです。頑張りでも信仰の心は与えられないのです。ルターの言うように、**まず、私たちに救おうとする神様の恵みがある**のです。握りしめた拳ではなく、空っぽの掌(てのひら)を神様に差し出す時に、神様はそこに恵みを掴ませて下さるのではないのでしょうか？

ヨブ記 1、2 章のヨブの態度は真に立派です。非の打ちどころがありません。優等生と言っても良い。しかし、そのヨブも**段々優等生ではいられなくなってきました**よね。その中でヨブは**一体これまでの自分の信仰とは何だったのだろう？**と考えたのではないのでしょうか。それこそサタンが言うように、利益がなくなれば神を信じなくなるような、そんな信仰だったのではないかと、それまで自分の足で立っていたと思っていたその足元がもうぐらついていたのだと思います。

でも、だからこそです。「お前は何者なのか？ わたしが大地を据えた時におまえはどこにいたのだ」との**神様の圧倒的な言葉**にひれ伏すしかなかったのです。これまで、信仰も自分ファーストでしか考えてこなかった。本当は**神様ファースト**なのだ、とヨブは塵と灰の上で伏し、悔い改めたのです。文字通り「自分を退け」たのです。だからヨブは言いました。「あなたのことを耳にはおりましたが、しかし今、この目であなたを仰ぎ見ます」(42:5)。アタマの信仰、理解の信仰から、出会いの信仰、体験の信仰に変えられたのです。「悔い改め」とは正にそのことです。

#### [5]神様の「出来過ぎ」の祝福を受けている私たち

さて、最初の方でヨブ記の最後の最後はハッピーエンドになっていて、何か肩すかしを食う感じがすると言いました。しかし、私はこう思いました。このヨブへの癒しと祝福は、別にヨブの**努力の結果**ではない。それこそ**一方的な恵み**です。ヨブはそこまでのことは期待していなかったに違いありません。ただ神様がヨブを憐れんで下さったことです。その事実にあつと思わされたのです。

私たちも同じではないか、ということ。私たちが神様の恵み・祝福を頂くために何を

したでしょうか？何かの行為の結果で神様が祝福して下さったのではありませんよね。神様は、私たちが求める前から、私たちに必要なことをご存じのお方だとあります。だからこそ、だからこそ、神様は私たちに御子を下さったのです！私たちが求める前からです！

ヨブ記の最後はこのひと言です。「ヨブは長寿を保ち、老いて死んだ」(42:17)。地上の祝福を溢れん程に受けたヨブも、最後は死で終わりです。これが旧約聖書の時代です。しかし、私たちはどうでしょうか！「御子を信じる者は永遠の生命を持つ」(ヨハネ 3:36 口語訳)とあります。私たちがどの様な地上の人生を歩もうとも、どんな試練が襲ってこようとも、この御子イエス・キリストを心に宿している私たちの内には、死後だけではなく、もう既に永遠の生命が始まっているのです。

あのヨブがまだ知らなかった神様を、主イエス様を、私たちは知らされているのです。何と幸いなことでしょうか！ヨブへの最後の祝福が出来過ぎだと思ってしまった私ですが、待てよと思いました。私たちはさらに大きな祝福、ヨブ個人だけではなく、全ての人のために用意される“出来過ぎた”祝福を頂いているのです！

神様はこのようにも仰っておられます。「わたしたちすべてのために、その御子をさえ惜しまず死に渡された方は、御子と一緒にすべてのものをわたしたちに賜らないはずがありませんか。」！(ローマ 8:32)

#### [結] 希望に支えられ、忍耐を持って主に信頼する

そうであれば、私たちはこの地上を、確かな希望に裏打ちされて、忍耐を持って、共にとりなし合いつつ歩んで行きたいと思えます。来月はイザヤ書から聞いて参りますが、そのイザヤ書の言葉を一つお読みしてお祈りしたいと思います。

イザヤ書 50 章 10 節。「お前たちのうちにいるであろうか。主を畏れ、主の僕の声に聞き従う者が。闇の中を歩むときも、光のない時も、主の御名に信頼し、その神を支えとする者が」。

#### [祈り]

主イエス・キリストの父なる神様、御名を讃えます。

ご一緒に「ヨブ記」から、私たちへの祝福のメッセージを聞くことが出来、感謝申し上げます。ヨブが最初に言った言葉「わたしは裸で母の胎を出た。裸でそこに帰ろう。主の御名はほめたたえられよ」が新しく響いて参ります。そうです、私たちはあなたの前では裸です。何もかもあなたはご存じです。そのあるがままの私たちを愛して下さい。主イエス・キリストを送るほどに愛して下さい。どうかそのあなたの溢れる恵みを、しかと受け取ることが出来ますように。

今日礼拝に足を運ぶことが出来なかったお一人おひとりとも共にいて下さい。

救い主イエス・キリストの御名によってお祈り致します。 アーメン。